

AKEMI KOZU TOSTO

Exec. Producer/Director/Writer

Born and raised in Tokyo, Japan, Akemi Kozu Tosto followed her dream of becoming a Hollywood filmmaker by moving to LA soon after graduating high school. She learned filmmaking working on TV, commercial and motion picture productions helmed by such Hollywood heavy hitters such as Steven Spielberg and Quentin Tarantino. A feature project "WHEN I WAS A HUMAN: THE MOVIE" is based on Akemi's short film "When I Was a Human," distributed worldwide by Shorts International, the official short film distributor for the Academy of Motion Pictures. The project is currently in development through her production company AKT Pictures.

コウズ アケミ
神津トスト明美さん『When I Was A Human: The Movie』製作総指揮 / 監督 / 脚本
映画製作会社 AKT Pictures LLC 代表取締役

12歳で映画に魅せられハリウッド映画業界入りを決める。高校留学でロサンゼルスへ。大学卒業後は日米欧のTV、映画、CMプロダクションに携わり、スビルバーク、タランティーノといったハリウッド大物監督作品製作にも参加。現場で培ったノウハウをもとに製作した短編の1本、『ボクがにんげんだったとき (When I Was A Human)』がアカデミー賞公認配給会社 Shorts International に見初められ配給契約締結。北米・欧州TV放映後、全世界配信中。現在、AKTを通じ、劇場用長編『ボクがにんげんだったとき』を企画製作中。東京出身。LA在住。



Akemi Kozu Tosto

『ボクがにんげんだったとき』は、主人公の保護犬インディのマジカルな体験をおとして、愛されたいと願う心、捨てることへの不安、自分探しをテーマにしたユーモアあふれる映画。

映画に投資・クラウドファンディング

神津トスト明美監督は20年以上ハリウッドで映画やテレビの番組製作に携わってきた。タランティーノ監督やスビルバーク監督らの作品にも参加し、映画作りを実践の中で学んできた日本人女性だ。今春、劇場用長編映画『When I Was A Human: The Movie』の製作資金調達にむけて、米国投資型クラウドファンディング(CF)のキャンペーンを、アメリカ最大手の投資型CFサイト、PledgeMusicでスタートした。神津監督は、UCLAに通う学生時代に、同タイトルの短編作品『When I Was A Human』を作っている。その作品は配給会社を通じて世界各地で上映され、今もアマゾン・プライムビデオなどでも配信されている。

●自分探しをテーマに

映画の主人公「インディ」のモデルは、神津監督の愛犬インディ君だが、彼女の人生体験が「インディ」を通じて表現されているといえるかもしれない。

神津監督は子供の頃から犬が大好きだったが、親に反対されて犬を飼うことは許されなかったという。カリフォルニアで一人暮らしを始めたとき、アニマルシェルターでインディと出会って、念願だった犬との暮らしが始まった。インディは神津監督にとって特別な存在となる。しかし、仕事の関係で家を空けることが多かった神津監督は、ある日インディが家の中を荒らしまくっていたことに気づく。それを見て、神津監督は鍵っ子だった自分の気持ち、独りで寂しかったインディの気持ち、独りで寂しかったインディの気持ちが痛いほどよく分かったという。このことがきっかけとなり、ストーリーライン作品が出来上がった。



今回のCFキャンペーンで製作を目指す長編作品は、登場人物たちの間に巻き起こる出来事から、それぞれの個性や心の内が描かれ、ストーリーが膨らむという。映画では「人間になりたい」と願う「インディ」の夢を魔法のビスケットが叶えてくれる。しかし、いざ「にんげん」になった「インディ」は、自分がいなくなってしまうことで気落ししている飼主主キミをみて、戸惑ってしまう。愛されたいと願う心、捨てることへの不安、自分探しをテーマにしたユーモアあふれる映画をめざす。

●スターウォーズの力

病弱だった神津監督は子供のころ、原因不明の目眩に悩まされていたという。船酔いのような状態が続く、食事が喉を通らなかつた。病院をタライ回しにされたが、治療法が見つからず、体重が1ヶ月で10キロも落ち、医者から「入院しないと危険だ」と言われた。入学したばかりの中学では欠席が続き、留年の危機が迫っていた。生きる希望も失いかけていた。そんなある日、映画「スターウォーズ」が日本にきたことを知り、母親に連れ行っていた。そしてセガランドのそうだ、やつの思いで映画館に出かけた。スターウォーズを観て、映画館に走ったという。神津監督は「この映画を作っているところに行き、自分もそういう映画を作りたい」と、初めて生きた希望が湧いたという。その後、成長するにつれ、体調は少しずつ回復して、神津監督はアメリカの高校に留学した。「映画を作りたい」と願う気持ちが何よりの薬だったにちがいない。映画作りの夢を追いかけて、シネイカレッジを経て、UCLAで映画を学び、気が付くとハリウッド映画の製作現場で数々の経験を積み重ねるようになっていった。

●下積み時代

カリフォルニアで最初に就いた仕事は日系テレビ局。数多くの番組やコマーシャル製作にかかわってきた。しかし何年か働いたのち、やっぱり自分が求めているのは映画の世界だと、テレビ局の仕事を辞めた。周りの世界は「無謀なこと」と言われたそうだが、神津監督をよく知る友人は自分のやりたいことをやるべきだと、夢を追う彼女の後押しをしてくれたという。でも、決まった仕事が続いていなければならぬ。VanityとかHollywood Reporterなどの雑誌をみて、何のプロジェクトもなかった。手あたり次第に電話をかけたままだったそうだが、「今思うと確かに無謀だったね。でも、若くても何かやっていないというのは、ある意味、強みでもありました」と笑う。神津監督はそうして映画の世界に飛び込んだ。

●映画に投資

映画を観るのが好きでも、映画の製作に関わる機会はなかなかないのが普通だろう。でも、映画作りに関わることは想像がつかない。アイディアが生まれてからそれが形になるまでの迷走。多くの才能と資金が絡み合う。アートとビジネス、人間関係、テクニ

ロジャーにも左右される世界だ。

映画に投資するというのはかつては莫大な予算をカバするエグゼクティブ・プロデューサーなどのVIPといわれる人たちの世界だったが、アメリカでは新規産業活性化法に基づいて、2016年5月から投資型クラウドファンディングが認められるようになったため、だれでも自分が気に入った映画のプロジェクトに少額でもCF投資することが可能となった。だれでもプチ・プロデューサー気分になれるようになったのだ。これは、映画の投資に限られたことではなく、多くのスタートアップ民間企業が必要資金を投資型クラウドファンディング(Equity Crowdfunding)という形で個人投資家から資金を集めることができるようになった。

映画製作にかかる費用は莫大なので、その資金をどうやって確保するのか、製作者たちは四苦八苦する。映画を作るためには通らねばならない道といえる。神津監督は、今回のキャンペーンに先立って、最初に日本クラウドファンディングを試みた。慣れないことで手探りだったと語るが、その時の経験とファンが活かされ、今回のステップに繋がっている。今回のキャンペーンのプラットフォームはPledgeMusicを選んだのは、投資型クラウドファンディングという形が明確だからという。財務管理は公認会計士が毎年レポートを公開する義務があり、投資家は資金がどのように運用されているのかを知ることができる。条件にもよるが、映画が成功を収めた場合に、作品が出来上がったという満足感プラス、リターンが組み込まれるところが投資の魅力になっている。

今回の目標金額は5万ドル。映画の総製作費の見積もりは、これまでの経験から製作に関わる人数やスケジュールの日数、平均的なバジェットなどを考慮すると大体85万ドルになるという。今回募る5万ドルはキャストインディングに関わる資金で、ハリウッドの敏感なキャストインディングレクターの参加が可能になるそう。それによってプロジェクトを大きく前進させる計画になっている。

●百ドルから特典付き

目標金額5万ドルを達成させるために、多くの人にこの映画のことを知ってもらって参加してもらいたいと神津監督は語る。

投資型クラウドファンディングの受付金額は百ドルから可能で、特典はファンドルの金額によって違うが、千ドルや5千ドル以上になると、映画の終わりのスクリーンにSpecial Thanksとして名前が載ったり、レターヘッドの招待状がもらえたりする。詳細はウェブサイトを確認してもらいたい。

映画の配給プランとして、劇場公開の他に今主流になりつつあるオンライン配信も予定している。また、市場はアメリカだけに

Support

"When I Was a Human: The Movie"
『ボクがにんげんだったとき』

クラウドファンディングサイト
wefunder.com/akt.pictures

映画の公式サイト
aktpictures.com

に映画の説明と投資クラウドファンディングについて日本語での説明もあるので、興味のある方はご覧ください！



止まらない。ファミリーで楽しめるお話しなので、世界中の犬好きがターゲットに。特に犬のペットの数も多い中国はパワフルなマーケットとして注目。

今回のキャンペーンを開催するにあたって、非常に込み入った手続きやチャレンジが立ち上がったと神津監督はいう。しかし、チームを支えられ「とにかく今はまず映画を作ることに専念しています」という。実際には映画から派生する他のプロジェクトも将来の計画マップにいろいろありそう。『ボクがにんげんだったとき』という夢のある話ならでは楽しいストーリーやキャラクターが生み出せる可能性もありそう。『まだ、完成していないところにロマンもあるんです。夢のあるプロジェクトをサポートしてみませんか?』というのが神津監督からのメッセージだ。

●背中を押してくれた父親

短編ができて7年後にインディが亡くなった。その後月日の流れとともにインディを失った悲しみは心の奥にそっとしまいい、神津監督は幸せな生活を送ってきたが、3年ほど前にグラフィックデザイナーをしてきた大切な父親が他界した。神津監督は父親のことを反面教師みたいな人だったと語る。そうなるにはいけないという見本をみせられた人だった。……才能があるのにそれを生かせなかった父。なので神津監督は父親が亡くなった後、ずっと蓋をしてあったこの長編映画プロジェクトに息吹を当てることにした。スターウォーズに触発されてハリウッドを目指してきた神津監督は、「今やらなければ、やらずに一生が終わってしまう」と亡くなった父親に背中を押されて、一歩前に踏み出した。元氣の出る映画を作るために。(Noriko Carroll)